

1 ベと病【病原体：Peronospora属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 葉や根が侵されるが通常は葉の発生が多い。葉では、初め不明瞭な黄緑色の斑紋、後に多角形で灰白色の病斑を生じ、裏面に灰白色で粉状の菌叢を生じる。根に発生した場合、黒褐色で不定形の病斑がカスリ状に表れる。
- 2 晩秋および春期の低温多湿時に発生が多い。密植などにより通風採光が悪いと発病を助長する。
- 3 被害植物の組織中の菌糸や卵胞子が、次作の伝染源となる。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 間引きは早めに行い、通風採光を良くする。
- 2 適正な肥培管理を行う。
- 3 発病葉の処分を行う。

C 薬剤防除のポイント

発病しやすい時期は発生に注意し、発病初期から薬剤防除を行う。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

2 萎黄病【病原体：*Fusarium*属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 主に根が侵されるが、全身的に症状を生じる。被害根は灰白色を呈し、道管が侵されるため断面は黒褐色のリング状に変色する。葉では下葉から黄変し、萎ちょうして枯死する。
- 2 高温期に発生が多いが、は種後1か月の平均地温が25℃以上のときに被害が大きくなる。
- 3 病原菌は他のアブラナ科作物にも寄生し生存する。
- 4 病原菌は被害株の組織とともに土中に残り、土壌伝染する。また、種子伝染する。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 耐病性品種を栽培する。
- 2 連作を避け、多発ほ場では3～4年間アブラナ科以外の作物を栽培する。
- 3 秋作ではできるだけ遅まきする。
- 4 被害残さの処理などほ場の衛生管理に努める。



農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

3 リゾクトニア病（根腐病・亀裂褐変症）【病原体：*Rhizoctonia*属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 幼苗地には地際部に褐色のややへこんだ病斑を生じ、苗立枯を引き起こす。生育中に侵されると、根の表面に円形や不整形の亀裂褐変症状を生じる。
- 2 主に夏ダイコンで発生が多い。特に多雨期に肥大～収穫期を迎える作型で被害が多い。
- 3 連作すると年々被害が増大する。
- 4 病原菌は被害残さや菌核などで土壌中に残り、伝染源となる。

根部の亀裂褐変症状



B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 連作を避ける。
- 2 ほ場の排水を良くする。
- 3 被害残さの処理を行う。



農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入力してください。



熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

4 黒斑細菌病【病原体：Pseudomonas属菌（細菌）】

A 発生生態

- 1 主に葉や根頭を侵す。葉では初め水浸状の小斑点を生じ、後に周縁が明瞭な褐色の病斑となる。根頭では初め灰色の小斑点を生じ、次第に黒変して不整形の斑点となる。
- 2 ダイコンの他ハクサイ、キャベツにも発生する。病原細菌が風雨等によって飛散し、作物の自然開口部や傷口から侵入する。
- 3 春と秋に発生が多く、温暖多雨のとき多発する。
- 4 早まきや砂質土で発生が多い。また、生育が衰えたときに発生が多くなる。
- 5 病原細菌は、種子や土壌及び被害植物について越冬して伝染源となる。また、土壌中では1年以上生存する。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 連作を避け2年輪作をする。
- 2 早まきを避ける。
- 3 肥料切れしないように肥培管理を行う。

C 薬剤防除のポイント

発病期には予防防除を徹底する。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

5 軟腐病【病原体：*Pectobacterium*属菌（細菌）】

A 発生生態

- 1 本病に侵されると、初め水浸状となり、後に軟化腐敗して特有の悪臭を発する。
- 2 一般に夏期に発生が多いが、春・秋にも温度の高いときには発生する。また、降雨が多いと多発する。
- 3 病原細菌は降雨のときに土粒とともに飛散し、傷口や食害痕から侵入する。
- 4 病原細菌はきわめて多犯性であり、ハクサイ、ジャガイモ、ネギなど100種類以上の作物を侵す。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 連作を避ける。
- 2 ほ場の排水を良くする。
- 3 被害株を処分する。

C 薬剤防除のポイント

発病期には予防防除を徹底する。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

6 ウイルス病【病原体：下記のとおり（ウイルス）】

A 発生生態

- 1 モザイク病は、カブモザイクウイルス（T uMV）、キュウリモザイクウイルス（CMV）、カリフラワーモザイクウイルス（C aMV）によって引き起こされる。ウイルスはアブラムシ類により伝搬される。
- 2 幼苗期に感染したもののほど被害が大きくなる。
- 3 品種により耐病性にかなりの違いがみられる。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 耐病性品種を選ぶ。
- 2 障壁作物を間作する。
- 3 プラスチックシルバーフィルム等によるマルチ栽培を行う。
- 4 ほ場周辺の雑草は媒介虫の増殖源となるため、除草を行う。

C 薬剤防除のポイント

媒介虫の防除(アブラナ科虫害の項を参照)。

T uMV、CMV、C aMV：アブラムシの防除を行う。



農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！